
「令和4年度 飼料用米多収日本一」 受賞者の取組概要

【単位収量の部】

農林水産大臣賞

農産局長賞

全国農業協同組合中央会会長賞

全国農業協同組合連合会会長賞

協同組合日本飼料工業会会長賞

日本農業新聞賞

1 農事組合法人 長戸北部営農組合 (茨城県)

2 株式会社 山中農産 (埼玉県)

3 農事組合法人 ふながわ (富山県)

4 香山 行徳 (茨城県)

5 高杉 伸悦 (青森県)

6 福士 浩樹 (青森県)

【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞

農産局長賞

全国農業協同組合中央会会長賞

全国農業協同組合連合会会長賞

協同組合日本飼料工業会会長賞

日本農業新聞賞

7 小久保 栄一 (埼玉県)

8 永松 英昭 (佐賀県)

9 倉持 信雄 (茨城県)

10 氏家 信夫 (宮城県)

11 海地 博志 (山口県)

12 農事組合法人 祖父江営農 (岐阜県)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
オオナリ、北陸193号	31.6ha	916kg/10a	382kg/10a (534kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 役員2名、従業員(パート含む)4名
- 規模拡大の予定はないが、地域に遊休農地を作らないように農地を引き受けている。
- 飼料用米の作付ほ場の一部は3年に1度、大豆とのブロックローテーションを行う。

【作付品目】

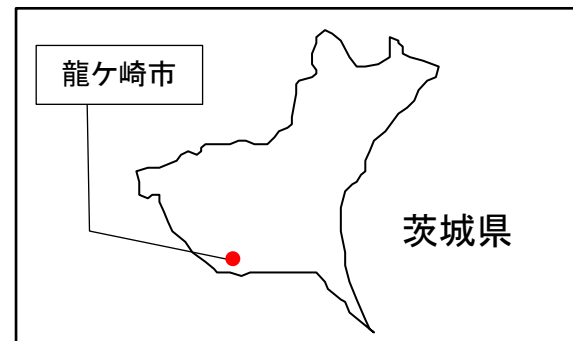
- 主食用米 ヒカリ新世紀、コシヒカリ等 7.4ha
- 飼料用米 オオナリ、北陸193号 31.6ha
- 大豆 里のほほえみ 17.6ha

【取組のきっかけ】

- 「オオナリ」を平成28年産から導入。それまで作付ていた「夢あおば」等と比べ、より多収が期待できることから主力品種とした。
- 令和2年からは多収品種で複数年契約を行っている。

【取組概要】

- 稲わらは全量をすき込むとともに、収穫後は豚ふん堆肥を800kg/10a施用して土づくりを行っている。
- 育苗箱1箱当たりの播種量を200g程度と密に播種して、育苗ハウスの使用面積を圧縮して管理作業を省力化している。
- 8条植えの田植機を使用し、植付けを45株/坪の疎植にすることで、育苗数を12~13枚/10aに抑えてコストと労力の低減に努めている。
- 田植えと同時に基肥一発肥料(飼料用米専用一発・早生用)を40kg/10a施用。出穂後7日頃を目安に窒素成分で1kg/10aを農業用ドローンで追肥している。また、病害虫の防除として育苗箱施薬と農業用ドローンによる殺虫殺菌剤の散布を行い、雑草防除は田植え後初中期一発のジャンボ剤を使用する等、作業の省力化に努めている。
- 収穫は適期収穫を心がけている。出荷はフレコンを使用し、随時、実需者に直接引き取ってもらうことで、保管場所を必要としない。
- 通常4~6インチロールが一般的である粃すり機を、8インチロールにすることで作業効率の向上を図っている。
- 主食用米の田植えは4月下旬に行い、飼料用米の田植えは5月の連休から開始して5月中に終わる等、作業時期の分散を図っている。
- 地域の養豚業者と連携し、養豚業者に飼料用米やもみ殻を提供するとともに、豚ふん堆肥を購入して土作りに活用している。
- 周辺地域の農業者や関係者等と日頃から情報・意見の交換や助言を行っている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
みなちから	1.4ha	881kg/10a	368kg/10a (513kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 常勤2名、臨時雇用1名
- ほ場集約・団地化に努める。地域では離農者も多く、求められれば規模拡大も視野に入れている。
- 米・麦・大豆の2年3作を行っている。今後は子実用とうもろこしをローテーションに加え、地域の畜産農家との需給体制の構築を検討している。

【作作品目】

- 主食用米
ほしじるし、彩のかがやき、彩のきずな 8.0ha
- 飼料用米 みなちから 1.4ha
- 米粉用米 7.0ha ○ 小麦・大麦 45.0ha
- 大豆 10ha ○ 子実用とうもろこし 16.0ha
- 業務用ブロッコリー(JGAP取得) 1.0ha

【取組のきっかけ】

- 米価の動向を踏まえた経営判断で、3年以上前から飼料用米の作付に取り組んでいる。当初栽培していた「オオナリ」は草勢が過剰で、脱粒性も見られた。そこで、短稈で難脱粒性であり立毛乾燥ができることから、育てやすくコンバインへの負荷が少ない「みなちから」を選んだ。

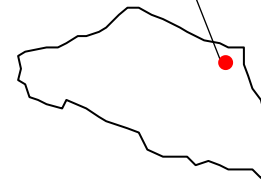
【取組概要】

- 稲刈り後は速やかにカルチベーターで田起こしをし、土を乾かすことを心がけている。
- プール育苗を行い、水管理の省力化を図っている。田植えは育苗箱を1反あたり15枚としている。
- 施肥については、は種時に育苗専用肥料「苗箱まかせ」による箱底施肥を行うことで肥料効率化を図っている。また、田植時に被膜プラスチックによる海洋汚染を軽減した肥料「Jコート」を側条施肥にて施用し、無駄のない施肥を心がけ費用を抑えている。
- 病虫害防除については、播種時に殺菌剤の注入、田植え時に殺虫殺菌剤を箱施用している。その後、病虫害防除は行わず、省力とコスト低減を図っている。
- 雑草防除については、田植え時に初期剤を散布、その後ラジコンボートで初中期フロアブル剤を散布している。防除は2回のみ。
- 収穫は立毛乾燥とし水分16%まで乾燥させたのち行っている。乾燥機で14.5%まで乾かしJAへフレコン出荷をしている。
- 水稻では早生の「彩のきずな」、中晩生「みなちから」、晩生「彩のかがやき」等、栽培することで、収穫時期の分散をしている。
- 全農の営農管理システムZ-GISを利用。ドローンの導入を検討している。



加須市

埼玉県



3 農事組合法人ふながわ 代表者 由井 久也 (富山県下新川郡朝日町)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	6.1ha	871kg/10a	312kg/10a(559kg/10a)※

※作柄調整後の地域の平均単収



【経営概況】

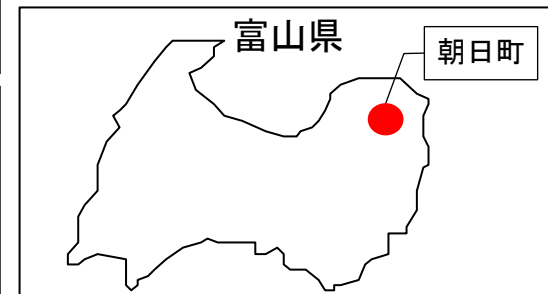
- 地域の若い担い手の問題提起を機会として設立された集落営農組織から始まり、平成19年に法人化して発足。
- 代表者: 由井 久也
- 組合員 [R4]: 32名

【作付品目】

- 主食用米 33.0ha
: コシヒカリ、富富富、てんたかく
- 飼料用米: やまだわら 6.1ha
- 大豆: えんれいのそら 11.5ha

【取組のきっかけ】

- 平成27年に大区画ほ場整備(一筆1ha区画)をした際、飼料用米の作付を勧められ、「やまだわら」の作付を開始。倒伏しにくいことや作期分散が図れることが確認できたことから、種子生産体制の拡充にあわせて徐々に作付面積を拡大。



【取組概要】

- 土づくりを基本とし、ケイ酸の他にリン酸、カリを加えた配合肥料(120kg/10a)、鶏糞(300kg/10a)を散布。また、コンボキャスト(肥料散布機)を導入して散布を効率化している。
- ①主食用米の移植栽培、②主食用米の直播栽培、③飼料用米の順で収穫できるように作付し、作期分散。併せて、ほ場の水管理を徹底し、高単収を確保している。
- 飼料用米のほ場を固定することと機械の清掃を徹底することで主食用米への混入を防止している。
- 大区画ほ場の整備と飼料用米の団地化による効率化に加え、大区画ほ場に適した畦畔の傾斜が緩やかな耕作道(低段差緩傾斜耕作道)を整備して、大型機械の乗り入れやターンを容易にし、更なる効率化を実現している。
- 除草剤は、投げ込み式の大規模農家用製品を使用し、コストを低減。また、畦畔には芝を植えて畦畔除草の労力を軽減。
- 平成29年からスマート農業の取組を開始。センサー搭載コンバインを活用し、翌年のほ場毎の栽培管理に活用している。また、オペレーターの労力軽減を図るため、R4年度に自動操舵システムを既存の田植機に追加で導入している。

4 かやま ゆきのり 香山 行徳 (茨城県常総市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ほしじるし	6.0ha	799kg/10a	256kg/10a (543kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・父・母)
- 地域に担い手が少なく、規模拡大に積極的。効率的な作業が見込めるほ場を見極め集積する。また、規模拡大に伴うほ場管理の煩雑化に備え、営農支援システムKSASを導入した他、両親の高齢化を考慮し、アシスト機能付き田植え機を導入。

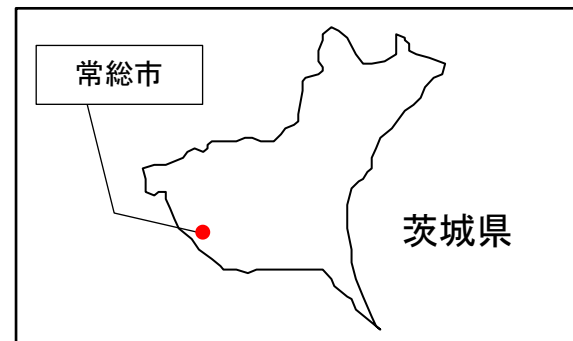
【作付品目】

- 主食用米 コシヒカリ 11.3ha
- 飼料用米 ほしじるし 6.0ha



【取組のきっかけ】

- 就農当初は飼料用米の栽培に苦慮していたが、移植時期や水管理の見直しにより改善した。
- 「ほしじるし」を選んだのは、①多収性があり、②イネ縞葉枯病抵抗性による減収回避と安定栽培が見込め、③主食用品種との作期分散ができるため。令和2年から複数年契約での栽培に取り組む。



【取組概要】

- 収穫後の稲わらは全量すき込む。腐熟促進のために硫酸を1袋/10a施用し、飼料用米栽培において多量にすき込むわらによるガスわき等の軽減を図る。
- 育苗資材は大ロットでまとめて購入し、一般的価格より安く入手している。近年の高気温を考慮し積極的に換気を実施する等、健苗の育成に努めている。
- 田植機を6条から8条のものに更新し効率化した。栽植密度は坪50株の疎植で行い、育苗箱数の削減にも取り組んでいる。また、秋～冬にかけてロータリーで4～5回程度耕転することで、春の耕転を省略し、ほ場に入水後1回の代かきでの田植えを可能としている。
- ①田植え前にブロードキャスターにより基肥一発肥料(BBファイト055)を10aあたり15kg全層施肥し、②田植え時には同肥料を10aあたり32kg側条施肥している。これらにより多肥が必要な飼料用米栽培において、多忙となる田植え時の肥料の補充回数を軽減し省力化を図っている。
- カメムシ・いもち病・紋枯病を対象とした市の空中散布(7月下旬)に合わせて、晩生品種の飼料用米→主食用米の順に移植することで、両方の出穂期が空中散布時期に重なるように工夫している。カメムシ被害の予防策として、畦畔周辺の草刈りを出穂の2週間前を目安に実施している。
- 圃場周辺の雑草は、田植え前→田植え後(6月)→8月上旬→10月下旬に除草剤または刈り取りによって対応している。圃場内の雑草は、田植えと同時にクラー1キロ粒剤を施用し、田植え10日後頃にコメットジャンボ(ほ場の四辺から投げ込み)を施用している。
- 燃料費削減を意識して、立毛乾燥を行い、ほ場内で水分を下げてから乾燥している。収穫・乾燥調製後、玄米にしてフレコンに詰め、JAIに出荷している。
- 普及センターでの現地検討会や農協の栽培講習会に参加し、肥料や農薬についてメーカー等と情報交換・収集を行い、実践している。

5 たかすぎ しんえつ 高杉 伸悦 (青森県五所川原市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ゆたかまる	3.7ha	811kg/10a	172kg/10a (639kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人)、繁忙期には親戚が手伝う。
- 近隣の飼料用米生産者と共に、収穫から販売までの作業を委託し効率化。

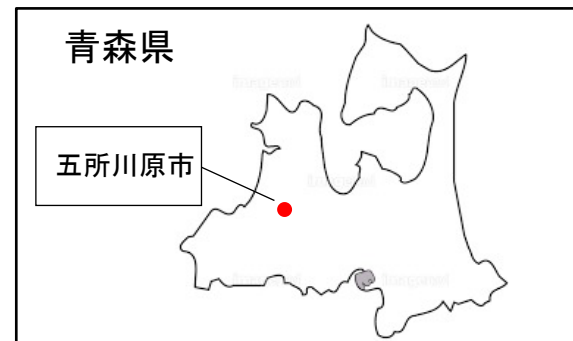
【作付品目】

- 主食用米 まっしぐら 0.3ha
- 飼料用米 ゆたかまる 3.7ha
- 枝豆、とうもろこし 0.1ha



【取組のきっかけ】

- 食料自給率が低下する中、畜産物の飼料を国産化することで食の安全・安心につながる取組に共感し、平成28年産から取り組んでいる。



【取組概要】

- 協力して飼料用米生産をしている地域の中核的生産者と相談の上、耐倒伏性が強く収穫作業のし易い「ゆたかまる」を選定。
- 施肥管理は、①肥料成分の高い異なる肥料(らくしょう、ハイチツソ、エコラク)を、どのほ場もN成分が12kg/10aとなるように散布し、肥料による生育等の違いを試験し、②生育が悪いところのみ動力散布機で追肥(ちょいまき)を1回行うことで、多収を実現している。
- 雑草防除は、田植え4日後に除草剤(トップガン)を機械などを使用せずに畦から投入している。何年も作付けしていないほ場を地域から引き受けた場合は、代かき後にも除草剤(チリクサ)を使用し、雑草対策している。
- 生産コスト低減を図るため、①折衷苗代での育苗で水管理の時間を短縮する、②60株/坪で疎植栽培をする、③乾燥・調整にフレコンを使用するなどコスト低減の取組を行っている法人に安価な委託費で収穫作業を委託する、等の取組を行っている。
- 種もみの浸種の際に、水槽用の循環ポンプを使用して酸素を種もみに与えるようにしており、育苗の際に芽揃いの成果が出ている。
- 協力して飼料用米生産している地域の中核的生産者及び実需者等と年2回の意見交換を実施し、市場の動向を把握するよう努めている。

6 ふく ひろき 福士 浩樹 (青森県五所川原市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ゆたかまる	10.7ha	818kg/10a	179kg/10a (639kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、息子)
- リンゴ収穫時期に臨時雇用あり

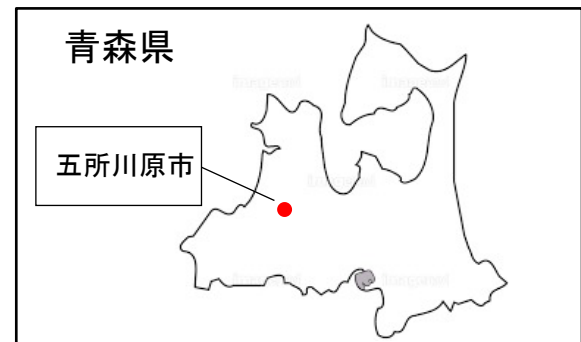
【作付品目】

- 主食用米 まっしぐら 3.7ha
- 飼料用米 ゆたかまる 10.7ha
- 新市場開拓用米 まっしぐら 0.6ha
- リンゴ 0.8ha



【取組のきっかけ】

- 稲作作業の省力化、経営の安定化を図るため、地域の農業者とともに平成27年から飼料用米に取り組む。



【取組概要】

- 一昨年まで作付けていた「みなゆたか」よりも、多収性に優れた品種「ゆたかまる」を選定。
- 施肥管理は、①ケイ酸質土壌改良材(ケイカル)と、もみ殻を燃やした灰をほ場に施用し、②一部ほ場では稲わらのすき込みも行い土作りを行っている。②基肥は高窒素成分の一発肥料(水稻一発らく省コート077多収米用100日)を用いて窒素成分12kg/10aをブロードキャストで施用し、③葉色を見て高窒素成分の肥料(ちょいまきN30)を施用することで、多収を実現している。
- 生産コスト低減を図るため、①家族で事前に役割分担の打合せを実施し、作業分担により所有する機械を効率的に利用することで労働費を削減、②プール育苗により水管理の時間短縮、③播種量を150g/箱→250g/箱と密度をあげ、箱数を削減、④60株/10aで疎植栽培を実施、⑤フレコン出荷し運搬経費等の削減等の取組を実施している。
- 雑草防除については、除草剤2種(シンウチEW、エリジャン乳剤)を田植え前に散布し、田植え後に別の除草剤(天空ジャンボ)を畦から投げ込みにより散布している。
- インターネットを通じて、上記の新しい技術を情報収集するとともに、実践している。

7 こくぼ えいいち 小久保 栄一 (埼玉県深谷市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	3.6ha	843kg/10a	373kg/10a (470kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・妻) ○ 減農薬・減化学肥料
- 積極的な規模拡大は行わないが、離農者等の農地を引き受けている。
- 農業機械もオークションなどを常にチェックし、安価で取得している。作業はできる限り自ら行い、機械化できるものは積極的に行っている。

【作付品目】

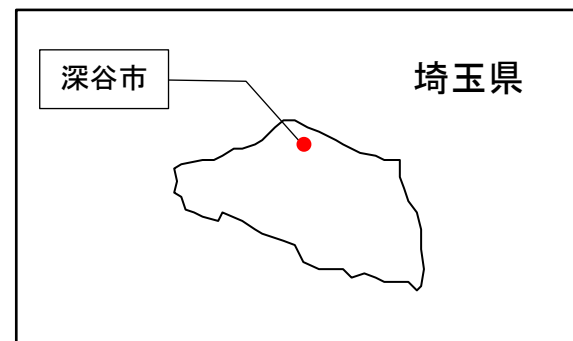
- 主食用米
コシヒカリ、彩のかがやき 2.0ha
- 飼料用米 北陸193号 3.6ha

【取組のきっかけ】

- 多収品種でどれだけ収量が上がるのか興味があったこと、所得計算が予測できたこと、飼料用米なら籾出荷でき省力・低コスト化が見込めたこと、販売先を見つけられたこと、また、地域農地保全のメンバーとして地域住民への稲作栽培継承の一例として示すことができる、等の理由から飼料用米を作付するようになった。
- 「夢あおば」では収量が伸びず、多収が見込める品種について調べ、3年前から「北陸193号」を作付。

【取組概要】

- 稲わらをすき込み、鶏ふんの完熟堆肥を施用している。鶏ふんは必要量をまかなうため、何回かに分けて引き取りを行う必要があり、都度施用している。
- 育苗箱を1反あたり12.7枚とし、運搬の労働力を軽減している。なお、育苗は自分でやっている。
- 以前は、育苗箱を運搬し、ほ場に降ろす作業をしていたが、現在は、作業効率を重視し、軽トラから直接田植機に移すなどの工夫をしている。株数は機械で設定できる一番少ない坪あたり33株としている。
- 畜産農家に主食用米を提供し、マニュアルプレッタを無料で借りている。なお、化学肥料は環境への配慮およびコスト低減のため使用していない。
- 育苗箱の殺虫、殺菌は行うが、ほ場には殺虫・殺菌剤は一切使用しておらず、コスト低減に繋がっている。
- 当該品種は草丈が高く、雑草に日が当たらないため生えなくなる。ヒエ対策として、除草剤「エリジャン乳剤」を1反あたり、300ccほど施用する。
- 主食用米と作業時期がずれるよう、栽培品種を選定している。作業効率化及び籾すりの際の粉塵対策として、フレコンを用いてモミで出荷している。
- 地域の栽培暦作成に協力し、技術の周知を行っている。また、個人からの技術の相談があり、個人毎に適切なアドバイスを実施している。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	1.4ha	741kg/10a	225kg/10a (516kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、息子の3名)
- 近隣の飼料用米生産者との共同出資で飼料用米専用乾燥機等を設置、共同利用による経費節減を図る。

【作付品目】

- 主食用米 さがびより等 5.5ha
- 飼料用米 ミズホチカラ 1.3ha
- 小麦 1.4ha ○ 大麦 6.0ha
- 大豆 0.5ha ○ れんこん 1.5ha



【取組のきっかけ】

- 実需者からの要望により、H28年に飼料用米の取り組みを開始。現在に至るまで安定的な収量を確保している。



【取組概要】

- 耐倒伏性が強く、多収かつ栽培が容易なため、ミズホチカラを作付けし続けている。晩生品種なため、主食用米との作期分散、労力分散が図られている。
- 生産コスト低減を図るため、下記事項に取り組んでいる。
 - ① 共同育苗、密苗 ② 疎植(50株/坪) ③ 元肥は、田植時に側条施肥。
 - ④ 防除は、ウンカ対策の箱剤のみ。病害虫が発生した場合は、単剤を散布。
 - ⑤ 牛ふん堆肥を無償で提供してもらい、代わりに稲わら・麦わらを近所の畜産農家に供給(耕畜連携)。
 - ⑥ 乾燥機を自己保有。 ⑦ フレコンによる近隣農業者との共同出荷。
- 実需者と、年に数回、施肥のタイミング等の栽培管理について打ち合わせを行い、生育状況の確認を行いながら管理しており、実需者ニーズを満たした品質のものを出荷している。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ほしじるし、にじのきらめき	9.8ha	853kg/10a	310kg/10a (543kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・妻・息子)
- 規模拡大には意欲的だが、地域には担い手が多いため、無理に規模拡大はせず、耕作放棄地がある場合は集積している。
- 特に水管理に注意を払っており、茎数制御や根の健全化を意識して栽培を行う。

【作付品目】

- 主食用米 コシヒカリ、ミルキークイーン 11.8ha
- 飼料用米 ほしじるし、にじのきらめき 9.8ha
- 小麦(さとのそら)、大麦(カシマゴール) 22.0ha
- 大豆 里のほほえみ 2.4ha



【取組のきっかけ】

- 「ほしじるし」と「にじのきらめき」を選んだのは、①多収性があり、②地域で問題となっているイネ縞葉枯病抵抗性を持っており、③主食用品種との作期分散ができるため。令和2年から複数年契約での栽培に取り組む。

【取組概要】

- 収穫後の稲わらは全量すき込んでおり、分解促進のため、秋から冬にかけてロータリーで4回程度耕耘している。また、県内業者に委託し、鶏糞堆肥を10aあたり550kg散布してもらっている。
- 3年ほど前からプール育苗を導入したことで、灌水不足による障害の発生を防いで均一に育苗できるようになり、省力化にも寄与している。
- 田植えは8条植えの田植機で行っている。日頃からメンテナンスをしっかりと行い、故障や修理のリスク低減に努めている。また、栽植密度は50株/坪で行い、使用苗箱数は13枚/10a程度としている。秋～冬に耕耘を行うので、春の耕耘を省略して1回の代かきで田植えを行っている。
- 基肥には、高成分の窒素を含有するBBファイト055を10aあたり40kg側条施肥し、窒素の利用率を高めて多収性を発揮しやすいようにしている。
- 病害虫防除として7月下旬に市で一斉に実施される空中散布を活用しており、いもち病・紋枯病・カメムシ防除を同時に行っている。また、雑草防除として、田植え後に、初中期一発剤としてポデーガードプロジャンボを散布し、残草がある場合には、生育中期にレブラスを散布している。
- 中生(コシヒカリ)→中晩生(にじのきらめき)→晩生(ほしじるし)の順番で、移植や刈取り作業を重複させずに続けて行い、作期分散を図っている。また、収穫については適期収穫を心がけ、作業場で乾燥・調整後、玄米にしてフレコンに入れ、農協に出荷している。
- 農協主導の新品種や栽培技術に関する講習会や、現地巡回等に参加することで、情報収集や意見交換を行い、栽培技術の向上を心がける。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
萌えみのり	2.4ha	772kg/10a	238kg/10a (534kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人)、農繁期は、妻や嫁いだ娘家族が手伝い
- 水稻を中心にリンゴ、かぼちゃを作付け(近隣地域ではリンゴ作付は少ない)

【作付品目】

- 主食用米 ひとめぼれ 3.1ha
- 飼料用米 萌えみのり 2.4ha
- リンゴ 0.3ha
- かぼちゃ 0.2ha
- 牧草 0.1ha



【取組のきっかけ】

- 地域における需要に応じた生産の取組として、全農スキームにより安定した収入が見込まれる飼料用米生産を令和3年から取り組んでいる。品種は、業務用米として作付けした経験があり、作り慣れている「萌えみのり」で取り組んでいる。



【取組概要】

- 耐倒伏性があり、多収の「萌えみのり」について、地元JAと複数年契約を締結することにより、種子の確保から販売まで安定した経営が可能になっている。
- 施肥管理は、①秋と翌春に2回稲わらをすき込み、②基肥は成分25-11-7の肥料(セラコートR入り複合2517(A4DE))を田植え同時側条施肥で施用し、③葉色を見て単肥の尿素を使用することで、多収を実現している。
- 作業の省力化・生産コスト低減を図るため、①播種量を150g/箱から180g/箱へ密度を上げ箱数を削減、②プール育苗により水管理の時間を短縮、③病害虫防除はプール育苗の際に箱処理剤を使用、④除草剤は田植え同時処理剤(ジャスタ1キロ粒剤)を使用、⑤法面除草はモア、傾斜がきつところはスパイダーモアを使用、⑥収穫前に水分値が20%前後にまるまで立毛乾燥を行い、乾燥コストを抑制(主食用米との作業の分散も図れる。)、⑦フレコン使用の取組を実施している。
- 地元JAが開催した「萌えみのり」栽培講習会に積極的に参加し、栽培技術の向上に取り組み、多収を実現している。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号、みなちから	2.3ha	779kg/10a	240kg/10a (539kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人と妻)、
農繁期には従業員を期間雇用
- 近隣農家(3経営体)の乾燥・調製作業を受託

【作付品目】

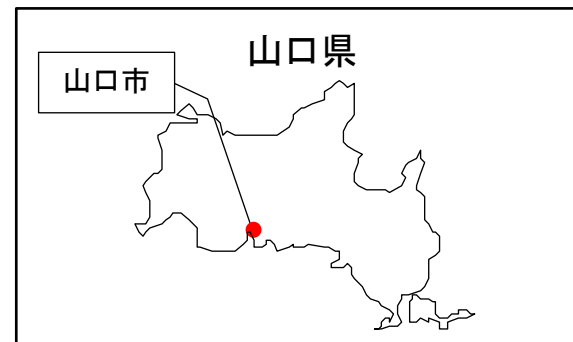
- 主食用米
ヒノヒカリ、恋の予感、中生新千本等 2.3ha
- 飼料用米(種子用を含む)
北陸193号、みなちから等 4.2ha

【取組のきっかけ】

- 実需者の食の安全・安心へのこだわり、耕畜連携による持続可能な地域循環型農業のモデルづくりに共感するとともに、飼料用米取組による主食用米との作業分散や経営安定を期待して、平成22年産から本格的な飼料用米(当初は「モミロマン」)生産に取り組む。

【取組概要】

- 平成23年産から、より多収性で耐倒伏性に優れる「北陸193号」に変更。収穫時期が遅いことから、主食用米との作業分散や収穫等作業でのコンタミ防止が図られている。また、脱粒性が高いため、立毛乾燥を行わないことで裂果による脱粒を防止でき、株張りが良く草茎が固い部分を避け地上高30cmの部分を刈り取ることで収穫時のコンバイン負荷を軽減。
- 生産コスト低減を図るため、①疎植栽培(地域の慣行60株/坪から50株/坪へ)により資材費・労働力を低減、②耕畜連携の取組(実需者から鶏糞堆肥の無償供給を受ける)と、基肥・追肥での安価な単肥(硫安・尿素)使用により資材費を低減、③病虫害防除剤の苗箱散布、除草剤の移植時同時散布により労働力を低減、④実需者へフレコン出荷することで包装容器代・運搬経費を低減、⑤機械整備を自ら行うことで長期的な機械の使用による設備費低減の取組を実施。
- 実需者と実需者に出荷する飼料用米生産者が連携し、生育診断等を実施する現地圃場視察会等を行うことにより、生産者同士が切磋琢磨し、単収向上を目指している。



12 農事組合法人祖父江営農 代表理事 佐竹 利一 (岐阜県養老郡養老町)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号、みなちから	17.3ha	717kg/10a	247kg/10a (470kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収



【経営概況】

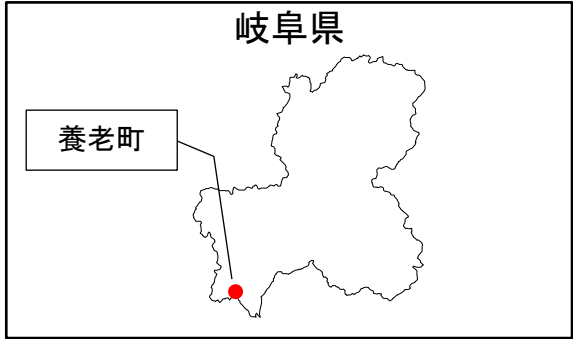
- 平成16年営農組合設立
- 代表及び作業従業員3名
- 地域の担い手不足と作業員の高齢化に対応するため、若手作業員の育成に努力。主食・飼料用米の2本立て。

【作付品目】

- 主食用米
ハツシモ 7.7ha
- 飼料用米(種子用を含む)
北陸193号・みなちから 17.4ha

【取組のきっかけ】

- 平成26年に営農組合からの法人化に伴い、効率的な栽培・作業を実現し、農地集積による団地化の推進として、収益性のある飼料用米に取り組む。



【取組概要】

- 農業機械の有効利用と作業の効率化を図るため、主食用米と飼料用米による作期分散を行い、戦略作物助成・産地交付金を活用し、収益向上を図る。
- 耐倒伏性に優れ低湿地地帯でもある当地での栽培に適した「北陸193号」を生産。本年産より疎植栽培、立毛乾燥等の省力・低コスト栽培に適した「みなちから」の生産も開始。
- 田植えは密播による育苗箱の減少と株間24cmの疎植化を行っており、病害虫防除剤は播種時に、除草剤は田植時に同時に行うことでコスト低減を図っている。
- 施肥は稲わらのすき込みとPKN7-7-30を10a当たり30～35kg散布。
- 立毛乾燥(水分17%前後)、地元の施設利用による乾燥・調整及びフレコン出荷によりコスト低減を図っている。
- 買取業者である岐阜養鶏農業協同組合がフレコンのまま供給先まで運搬することにより、流通コストの低減を図っている。